

にぎわい再生を目指す
ウイル西城は、地域の人が買い物を楽しむ場であると同時に、公共的施設を併設したコミュニティ活動の場という側面もあります。1階は日常生活品

景気の低迷による地域商店街型SC存続の危機という全国的な流れは、本市にも大きな影を落としています。西城町の中心地にある地域商店街型SC「ウイル西城」は、かつてない厳しい状況に直面しています。

ウイル西城は平成9年にオープンし、地域住民の身近なSCとして親しまれてきました。しかし、人口の減少や市内に大型店が出店したことなどにより来店者数が減少、当初12店舗あつたテナントも今は6店舗にまで減り、SCとしてのワンストップサービス機能が失われつつあります。ウイル西城を施設管理している西城町産業振興開発(株)は、この機能を維持しようと直営でサービスを提供。各テナントは人件費などあらゆる経費を圧縮し、この4月からは年中無休で営業していますが、来店者の増加にはなかなか結びついていません。

あるテナントスペース、2階は300人が収容できるホールなどの公共的スペースがあり、駐車場も完備しています。

現在、1階にある休憩スペースを活用し、産直市「五の市」を開催。食品売り場では、毎月新商品の検討会議を行い、ここでしか手に入らない商品の開発や販売を目指しています。また、2階ホールと1階テナントスペースを連動させる仕組みづくりなど、多角的な施設の利用も模索しています。

西城町産業振興開発(株)代表取締役の岡下清次さんは「観光情報サービスや土産物販売コーナーの充実など、市外からの観光客が立ち寄りたいと思える仕掛けにも取り組みたい」と話しています。『ウイル西城の顧客は地域住民。地域の発展や住みやすいまちづくりへ貢献することがウイル西城の強みになる』。この思いを胸に、住民から必要とされる地域商店街型SCとして営業努力を続けます。



写真はイメージ

市内地域商店街型SCの独自の取り組みを紹介

市内にある地域商店街型SCの経営は厳しい状況にありますが、それぞれが地域に密着した取り組みを行い、住民が利用しやすいSCを目指しています。

地域のお年寄りにやさしい「食品宅配サービス」



トーエイ(東城)

買い物に出かけるのが困難な地域の高齢者をなんとかしてあげたい。その思いから、宅配業者と提携し「トーエイネットスーパーおつかい便」を、平成22年11月から開始しています。電話、ファックスでも注文を受け付け、注文された生鮮、食料品などは翌日までに自宅まで配達されます。利用者からは「車がなくても色々な商品が買えるのでうれしい」と好評。代表取締役の宮永壽夫さんは「事業の手ごたえを感じている」と話しています。

声掛けで安否確認「移動販売車」



ウイル西城

平成22年7月から西城町全域を対象に移動販売車(あんしん号)の運行を始めました。町内を移動しながら高齢者に声掛けをし安否確認を行う「見守りの役割」も担っており、利用者からは「ウイル西城の移動販売車なので安心して買い物ができる」と好評です。代表取締役の岡下清次さんは「移動販売車が好調なほど、来店者の機会が減るという現実もある。移動販売車も喜ばれ、来店者も増えるのが理想」と話しています。

子育てをサポートする「アメニティ機能」



ジョイフルながえ(庄原)

ジョイフルながえでは「にぎわい創出」「人が集まるきっかけづくり」「アメニティ機能の強化」をキーワードに、三日の市の開催や歯科医院のオープンなどに取り組んできました。「子どもの遊び場が欲しい」という声に応え、今年の6月、子育てサポートステーション「あいあいキッズ」をオープン。理事長の宮崎良治さんは「利用者から安心して買い物ができると喜ばれているので継続したい」と話しています。

地域商店街型ショッピングセンターを考える

日本の人口は平成18年をピークに減少に転じ、超高齢化社会が到来しています。また相次ぐ大型店舗の出店などにより、今まであつた「地域商店街型ショッピングセンター」の経営がさらに厳しい状況に陥っています。もし、「地域商店街型ショッピングセンター」がなくなったらどうなるのでしょうか。単純に「困る」「不便になる」だけでない問題があります。今月2つ目の特集は、市内の「地域商店街型ショッピングセンター」(以下、地域商店街型SC)を取り上げ、地域社会に果たすべき役割と課題解決に向けた取り組みについて考えてみます。※超高齢化社会…65歳以上の高齢者の占める割合が全人口の21%を超えた社会

かつてにぎわった商店街は今、高度成長期、日本の商店街は活気であふれ、一日中人の流れがありました。しかし、現在は、人もまばらで閑散とし、シャッターを下ろしている店舗も多く、かつてのにぎわいを失った商店街が全国各地で増えています。

衰退の原因はどこにあるのか

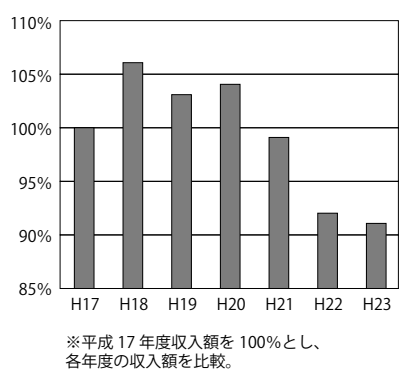
商店街は、交通の要所に店舗が集まることによって繁栄してきました。しかし、車社会の到来により交通の要所が変化し、大型商業施設へ人の流れが移ったことが衰退の一因だと指摘されています。加えて、少子高齢化、人口減少による購買力低下、インターネットなどの情報通信網や輸送サービスの発達、商店の後継者不足など、さまざまな要因があると考えられます。

希望の地域商店街型SCも存続の危機に

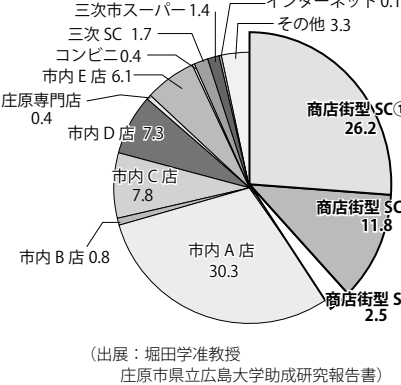
そういった中、地域の商業者は、購買力の流出を防ぎ、集客力を高めるため、大型店が持つワンストップ・ショッピング機能や利便機能を持たせた共同店舗(地域商店街型SC)を設置し、一定の集客を確保し経営を維持してきました。

ところが、今、地域の人に長く親しまれてきた地域商店街型SCも厳しい経営状況に陥っています。

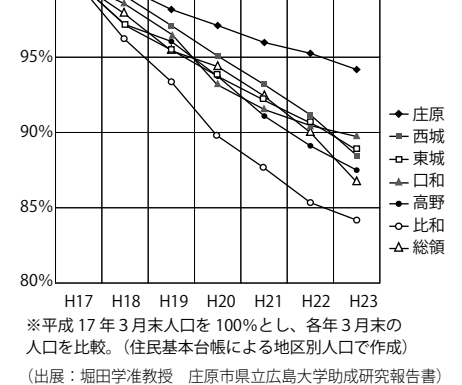
■市内商店街型SCの一部店舗の収入額推移



■店舗別買い物行動の実情



■庄原市の地域別人口の推移





堀田 学 さん

SCの活性化はまちづくりそのもの

■プロフィール
県立広島大学生命環境学部准教授、農学博士。昭和40年奈良県生まれ。平成7年に京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員を経て平成13年から現職。著書に『青果物仲卸業者の機能と制度の経済分析』農林統計協会、2000年(単著)など。農産物の流通研究から商店街にも目を向けた研究にも取り組む。

伊藤 「ウイル西城」の付近には、西城支所やまちづくりセンター、体育館や温水プールなどの体育施設、病院、保育所などの施設が集まっており、ここに出入りする人が自らの活動を促進させるために「ウイル西城」を「まちの駅」として利用してもらえる仕組みづくりが必要だと思います。人が集

会話と交流が生まれる。そういう地域の魅力が伝わっていくことが「まちの駅」の目指す方向だと思います。

堀田 地域のSCの活性化は商店街の活性化でもあり、まちづくりそのものです。どういうまちにしたいかという住民の意識があつたうえで、理想的なSCに作り変えていく必要があります。まず基本は住民だということです。が、今日の結論だと思います。

高橋 西城地域に限らず、まちづくりに答えはないと思います。できることから一つずつ実行し、良いものは吸収して悪いものは反省する。そうやって試行錯誤しながら一歩ずつ前に進んでいくしかありません。ただ高いハードルを作つても取り組みにくたびれてしまい、次に続かなくなつては意味がありません。みんなが楽しみながら自分のまちはこうしていきたいんだ、という取り組みが重要だと思います。

堀田 まつて活動するということは、色々なものを持ち寄ったり、活動する人々を応援したりします。ただ集まるだけではなく、それに付随してさまざまな影響力があります。これを大事にすることが、「まちの駅」として地域住民や観光客に必要とされるにぎわいの場へつながるのではないかと思います。

私たち備北商工会も、西城のまちづくりを含め「ウイル西城」の応援団として多くの仲間を増やし、具体的な取り組みを進めていきたいと思っています。

地域SCの活性化には“住民の意識”が大切

地域商店街型SCの活性化には何が必要か

もし地域商店街型SCがなくなれば、単に買い物ができず不便になるだけでなく、地域そのものが一気に寂れてしまうことが懸念されます。

地域商店街型SCをどう活性化していくかをテーマに、堀田学県立広島大学准教授、西城アイデア創出事業協議会会長伊藤郁夫さん、高橋利彰事業担当副市長に対談をしていただきました。



堀田 西城では「ウイル西城」を中心とした活性化について、具体的にどういった取り組みをされていますか。

伊藤 備北商工会内にアイデア委員会を設置し、将来に向けてどのように西城を活性化していくのか議論しています。そのなかで「まちの駅」ヒバゴンの里エリアという構想が生まれました。これは「ウイル西城」を核に観光サービスと住民サービスを併せ持つ「まちの駅」として行政、住民、農業、商業が連携する仕組みをつくるということです。西城の活性化に向けた思いを実現させていきたいと考えています。

まちの駅の魅力は地域の人で輝く



高橋 利彰 副市長

高橋 中心市街地が衰退しているなかハードの整備も大切ですが、それ以上にソフト面が大切です。町全体をどうするのか。それには市民の皆さんが自ら考え、できることから実行し、成功体験を積み上げることが大切だと思います。

堀田 地域のSCは量販店にも見えますが、実は立体的な商店街であり、まちづくりと目的は変わらないと思います。物を売るということよりも、ま

観光・住民サービスを提供するまちの駅に

■プロフィール
昭和33年大阪市生まれ。昭和61年9月に妻の故郷西城町へ帰郷。西城ふるさと祭実行委員長など活躍。現在は、備北商工会理事、西城アイデア創出事業協議会会長として、西城町の活性化に取り組んでいる。西城町中野在住。



伊藤 郁夫 さん

化していくと考えますが、いかがですか。

高橋 人口減少により利用客が減るのは避けて通れない現実です。ですから新しい発想で、地域がSCを育てるという考え方が大切です。「まちの駅」をいかに魅力ある施設にしていけるか、は、地域の人だと言えるでしょう。

特に買い物をするわけではないが、休憩スペースにいつも地域のおじいちゃんやおばあちゃんが集まる。自然と地域のお母さんや子どもたちが集まっ

3つのSCが研究会を発足

ジョイフルながえ、トイエイ、ウイル西城の3つのSCは、共通する問題や課題を抱えていることから、昨年度『SC研究会』を立ち上げ、勉強会の実施や合同イベントなどを企画・検討しています。

その中から、共通のポイントシール商品券「わくわくシールお母さんサックスフェア」を企画し、5月10日から20日までの10日間実施しました。急激な売上増が見込まれるものではないものの、3つのSCが協調した初めての取り組みであり、今後の活動に期待が寄せられます。

産学官連携でSCを支援

産業界、大学、行政などが連携し、産業振興や地域の活性化を目指すことを目的に活動している「しょうばら産学官連携推進機構」は、市内事業者が行う地域資源を活用した新商品の開発や販売促進

マーケティングを支援しています。

前述の「わくわくシールお母さんサックスフェア」もそのひとつです。

地域特性を活かした新産業の創出、地域課題の解決など、SCを含めた地域活性化へ、こうした産学官連携の取り組みにも注目が集まっています。

あとがき

今後も、庄原市の人口減少は進み、マーケットは確実に縮小していくと考えられます。これまでの経営戦略やマーケティング手法にはない、発想の転換による新たな価値の創造と顧客の獲得が求められています。

ジョイフルながえが中心に開催する「三日の市」は、近隣の商店との連携、手作り雑貨などのさまざまな出店もあり、市街地のにぎわいづくりにも貢献しています。

こういった取り組みの拡大が、地域課題解決に向けたひとつの方向性と考えられます。いま一度、地域商店街型SCが果たす役割や、地域商店街型SCを地域で育てるといった視点で考えてみる必要があります。